

I ライフプランニング と資金計画

<この課目で学習すること>

この課目では、ファイナンシャル・プランニングの現状や役割について学ぶとともに、ファイナンシャル・プランニングのベースとなるライフプランについて学びます。

ライフプランには、ライフイベント表やキャッシュフロー表、個人バランスシートの作成方法をおさえた上で、人生の三大資金である「教育」「住宅」「老後」に関連する知識を吸収してください。

特に、老後資金の柱となる公的年金などの社会保険制度は試験でも必須分野です。健康保険と年金保険を中心に数字や制度概要を把握してください。

<特に重点的に学習する内容>

第1章 ファイナンシャル・プランニングの基礎知識

・FPと関連法規 ・ライフプランニングの考え方・手法

第2章 ライフプラン策定上の資金計画

・教育資金プランニング ・住宅取得プランニング ・リタイアメントプランニング

第3章 社会保険

・健康保険と国民健康保険 ・介護保険 ・雇用保険

第4章 公的年金

・国民年金 ・厚生年金 ・老齢給付 ・遺族給付 ・企業年金と個人年金

第3節 ライフプランニングの考え方・手法

1 人生の三大資金

ライフプランを検討するうえで、もっともお金のかかる出来事3つとはいったい何でしょうか。それは、教育・住宅・老後になります。**教育資金・住宅資金・老後資金**を人生の三大資金と呼び、中長期的に計画的に準備する必要があるといえます。

2 ライフプランニングの考え方

ライフプランニングを行うためには、顧客情報の収集が重要となります。顧客情報には、年齢や収入、資産額など数値化できる**定量的情報**と、価値観や性格、ライフスタイルに対する考え方など数値化することができない**定性的情報**があります。いずれの情報も質問紙や面談によって収集します。顧客の同意のもと、必要に応じて顧客情報に関する書類のコピーを入手することもあります。

<定量的情報と定性的情報>

定量的情報	●家族の年齢、収入、支出、資産額（貯蓄額など）、加入している保険金額、年金額など
定性的情報	●今後の夢や希望、健康状態、ライフスタイルに対する考え方、価値観、家族の性格、資産運用や住宅取得等に対する考え方など

3 ライフプランニングのためのツール

ライフプランニングを行うために、以下の3つのツールを使います。

<ライフプランニングのためのツール>

ライフイベント表	●顧客の今後の生活におけるライフイベントや必要となる資金額を時系列にまとめた表のこと
キャッシュフロー表	●ライフイベントをもとに、将来の収支や資金繰りに問題がないかどうかを確認するための表のこと
個人バランスシート	●一定時点における資産と負債のバランスを示す表のこと

4 ライフイベント表

ライフイベント表とは、顧客やその家族の将来の予定や希望する出来事を年表形式でまとめたものになります。ライフイベント表を作成することにより、いつ何があるのかを把握でき、また必要な資金がいくらぐらいなのか見積もることができます。

<ライフイベント表の例>

西暦 (年)	家族の年齢				家族のイベント	必要資金 (万円)
	夫	妻	長男	長女		
2019	34	32	4	1	長男幼稚園入園	××万円
2020	35	33	5	2		
2021	36	34	6	3		
2022	37	35	7	4	長男小学校入学 長女幼稚園入園	××万円
2023	38	36	8	5		
2024	39	37	9	6	車買換え	××万円
2025	40	38	10	7	長女小学校入学	××万円
2026	41	39	11	8		
2027	42	40	12	9	住宅購入	××万円
2028	43	41	13	10	長男中学校入学	××万円
2029	44	42	14	11		
2030	45	43	15	12		
2031	46	44	16	13	長男高校入学 長女中学校入学	××万円
2032	47	45	17	14	家族で海外旅行	××万円
2033	48	46	18	15		

▼理解を深めるワンポイント！

●必要資金の見積もりは**現在価値**で記入します

●1年間の設定を1月～12月とし、12月末時点での年齢でそろえて表記します

<将来価値と現在価値について>

現在価値はいまのお金の価値であることはお分かりになることでしょう。それでは将来価値とは何でしょうか。これは、1年後など将来における資金の状況を示します。

例えば、現在手元に100万円あるとします。これを運用したことにより1年後に3%増えたとします。その結果、1年後に100万円は $100 \text{万円} \times 1.03 = 103 \text{万円}$ となっていることとなります。この103万円が将来価値となります。つまり、利子や運用により増える分も考慮した金額をさします。

反対に、この例ですと運用して1年後に103万円となりましたが、これを現在価値に直すと100万円となります。いまあるお金が現在価値となるわけです。

5 キャッシュフロー表

キャッシュフローとは、お金の流れのことで、家計における1年間の収入と支出から把握される資金の収支、およびその結果として増減する貯蓄残高のことをいいます。キャッシュフローをベースに、今後予想されるライフイベント・ライフプランを加味して、将来の収支状況や貯蓄残高を推測してまとめた表が**キャッシュフロー表**です。

キャッシュフロー表の数値は、利息や物価などを加味した**将来価値**で記入します。

▼キャッシュフロー表を作成する目的

- 家計における各年度の収支と貯蓄残高の推移を把握することにより、家計の支払能力や貯蓄能力の中長期トレンドを一覧できるようにするためです
- 今後のライフプランを検討するにあたっての問題点を発見しやすくなり、あわせて問題解決のための対策も考えられるようになるためです

<キャッシュフロー表の例 単位：万円>

	経過年数	基準年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	西暦	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028
家族構成	世帯主	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64
	配偶者	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62
	長男	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
	次男	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
収入	世帯主の可処分所得	646	646	646	646	646	646	646				
	配偶者の可処分所得											
	その他							2,000	66	66	66	66
【収入計】		646	646	646	646	646	646	2,646	66	66	66	66
支出	基本生活費(1%)	288	291	257	260	262	265	267	270	273	276	278
	住宅ローン	110	110	110	110	110	110	110	110	110	110	110
	住宅維持費	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24
	教育費	132	132									
	生命保険料	66	66	66	66	66	66	66	35	35	35	35
	損害保険料	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
	レジャー費								50	50	50	50
	車買い換え				200							200
	結婚						100					100
リフォーム費用							300					
【支出計】		630	633	467	670	472	575	777	499	502	805	507
【年間収支】		16	13	179	-24	174	71	1,869	-433	-436	-739	-441
年貯蓄利息(1%)			8	8	10	10	12	13	31	27	23	16
【貯蓄残高】		800	821	1,008	994	1,178	1,261	3,143	2,741	2,332	1,616	1,191

6 キャッシュフロー表の作り方

(1) キャッシュフロー表作成の際の必須項目

キャッシュフロー表には、最低限の必須項目として、以下の項目を記載します。各項目は、必要に応じて細分化します。

<キャッシュフロー表に必ず記載する項目>

①年間収入	②年間支出	③年間収支	④貯蓄残高
-------	-------	-------	-------

(2) 1年の設定・金額の単位

収支の計算は1年単位で行うため、どの期間を1年間とするのか基準を決める必要があります。一般的には、暦年基準（1月1日～12月31日）を用いるため、家族の年齢も12月31日時点の年齢を記載します。

キャッシュフロー表に記載する金額は、一般的に万円単位（万円未満四捨五入）で記載します。

(3) 年間収入と年間支出

キャッシュフロー表の作成に使用する収入には、**可処分所得**を記載します。可処分所得とは、年収から税金（所得税＋住民税）、社会保険料を差し引いた金額が該当します。

<可処分所得の計算式>

●可処分所得＝年収－税金（所得税＋住民税）－社会保険料

※いわゆる手取り金額といわれるもので、自由に使えるお金をさします

支出については、大きく分けると以下の項目などにわけて記載します。

<支出の項目例>

- | |
|------------------------|
| ①基本生活費（食費や被服費など） |
| ②住居費（住宅ローン、住宅維持費、家賃など） |
| ③教育費 |
| ④保険料（生命保険料、損害保険料など） |
| ⑤その他の支出や一時的な支出 |

(4) 変動率等の設定

キャッシュフロー表は将来のお金の流れを示しています。そのため、貯蓄や運用により増加するもの、物価上昇により費用が上がるものなどに関しては変動率を用い将来の金額を算出します（前頁のキャッシュフロー表では（1%）と記載しています）。

以下の計算式を用いることで、将来の金額を算出します。

<変動率を用いた将来の金額の計算式【試験によく出題される論点！】>

$$\bullet \square \text{年後の金額（予想）} = \text{現在の金額} \times (1 + \text{変動率})^{\text{経過年数}}$$

(5) 年間収支

年間収入から年間支出を差し引くことで求められます。

<年間収支の計算式>

$$\bullet \text{年間収支} = \text{年間収入} - \text{年間支出}$$

(6) 貯蓄残高

貯蓄残高は年間収支により増加した分を加味する必要があります。その際にどのように運用するかによって増える割合（運用率）は異なります。仮に普通預金で運用するならば、マイナス金利適用下の現状ではほとんど利息が見込めないため運用率を0%として保守的に計算することもあります。

<貯蓄残高の計算式【試験によく出題される論点！】>

$$\bullet \text{貯蓄残高} = \text{前年の貯蓄残高} \times (1 + \text{運用率}) \pm \text{年間収支}$$

▼試験にはこう出題された！

このキャッシュフロー表の空欄（ア）、（イ）にあてはまる数値の組み合わせとして、正しいものはどれか。なお、計算過程においては端数処理をせず計算し、計算結果については万円未満を四捨五入すること。（2019年1月 実技：資産設計提案業務）

<キャッシュフロー表・抜粋>

経過年数		基準年	1年	2年	3年	
西暦（年）		2018	2019	2020	2021	
ライフイベント		変動率				
収入	給与収入（夫）	1%	728	735	743	750
	給与収入（妻）	-	100	100	100	100
	収入合計	-	828	835	843	850
支出	基本生活費	2%	290			(ア)
	住宅関連費	-	147	147	147	147
	教育費	-	240	260	400	300
	保険料	-	36	36	36	36
	一時的支出	-				250
	その他支出	-	25	25	25	25
	支出合計	-	738		910	
年間収支		-	90		▲67	
金融資産残高（12/31時点）		1%	1,168	1,251	(イ)	

▼問題の解き方

(ア) 3年後の予想額 = 現在の金額 × (1 + 変動率)^{経過年数}

$$290 \text{ 万円} \times (1 + 0.02)^3 = 307.7 \text{ 万円} \rightarrow 308 \text{ 万円}$$

(イ) 金融資産残高 = 前年の金融資産残高 × (1 + 運用率) ± その年の年間収支

$$1,251 \text{ 万円} \times (1 + 0.01) - 67 \text{ 万円} = 1,197 \text{ 万円}$$

※上記の計算は、電卓で計算できるようになっておきましょう！

7 個人バランスシート【試験によく出題される論点！】

個人バランスシートとは、現時点での資産と負債の状況を示す表のことです。資産から負債を差し引くことで**純資産**を求めることができ、現時点の家計に余力があるのかどうか、負債が重荷となっていないかどうかを確認することができます。

純資産が多いほど健全といえ、マイナスの場合には**債務超過**に陥っているといえます。

なお、個人バランスシートの金額は**時価**で記入し、保険については**解約返戻金相当額**を記載します。

<個人バランスシートの例>

【資産】		【負債】	
現預金	300 万円	住宅ローン	2,000 万円
生命保険	200 万円	負債合計	2,000 万円
投資信託	100 万円	【純資産】	
自宅	2,500 万円	純資産残高	1,250 万円
自動車	150 万円		
資産合計	3,250 万円	負債・純資産合計	3,250 万円

必ず一致

▼理解を深めるワンポイント！

- 原則、資産と負債の金額は**時価**で記入します
- 例外として、生命保険については**解約返戻金相当額**（リスク管理の課目で学習）を記入します
- バランスシートのバランスとは、**資産と負債・純資産の合計額が常に一致**することを意味します
例えば、純資産が不明の場合、“資産－負債”で求めることができます

▼試験にはこう出題された！

●ファイナンシャル・プランナーがライフプランニングにあたって個人顧客のバランスシートを作成する場合、バランスシートに計上する有価証券の価額については時価、生命保険については作成時点の解約返戻金相当額を使用する。(2017年5月 学科)

→○

8 6つの係数【試験によく出題される論点！】

キャッシュフロー表の作成の他、将来の金額の算出や年金受取額の算出など様々な試算を行う際に計算を容易に行うことができる方法があります。それが6つの係数です。この6つの係数をうまく利用できるようなになれば、現在価値や将来価値も容易に算出できるようになることでしょう。

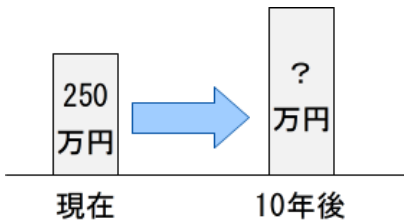
(1) 終価係数

現在の金額から将来の金額を求める際に利用します。今手元にあるお金を所定の期間、一定の利率で運用できた場合に、将来のある時点でいくらになるかを算出する際に用いる係数です。

<計算例>

現在の基本生活費が250万円である場合、物価上昇率を1%と見込んだときの10年後の見込額はいくらになりますか？1%、10年の終価係数を1.1046とします。

【計算方法】



$$250 \text{ 万円} \times 1.1046 = 276 \text{ 万 } 1,500 \text{ 円}$$

(万円未満四捨五入の時には276万円と記載する)

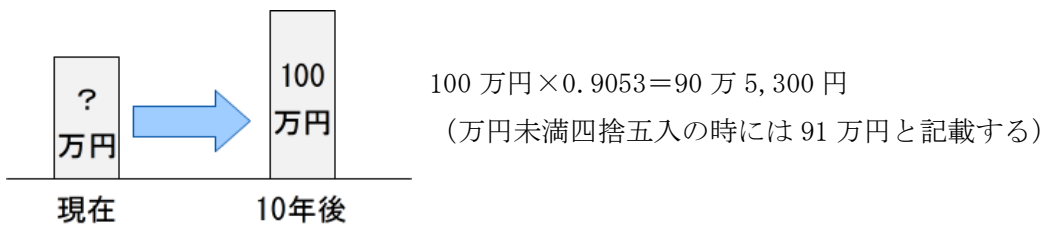
(2) 現価係数

将来の金額から現在の金額を求める際に利用します。一定の利率で運用しながら、将来のある時点で必要とする金額を得るためには、現時点ではいくらの金額があればよいかを算出する際に用いる係数です。

<計算例>

運用した結果、10年後に100万円を得たいと考えています。年利率1%で運用したとすると現在いくら必要ですか。1%、10年の現価係数を0.9053とします。

【計算方法】



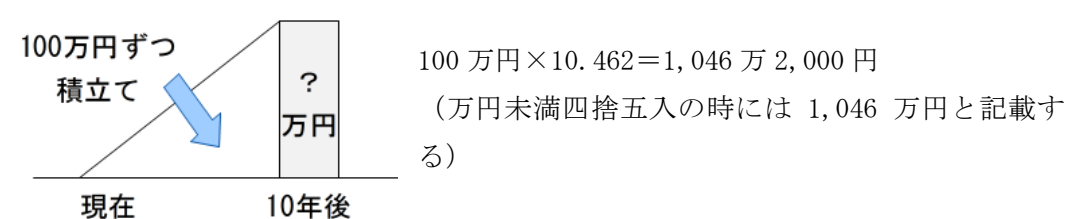
(3) 年金終価係数

毎年の積立額を一定利率で運用した場合の将来の元利合計を求める際に用いる係数です。

<計算例>

毎年100万円ずつ貯めた場合、年利率1%で運用したとすると10年後にはいくらになっていますか。1%、10年の年金終価係数を10.462とします。

【計算方法】



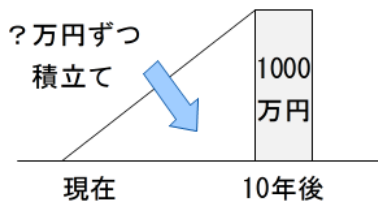
(4) 減債基金係数

一定利率で運用しながら、将来目標とする額を貯めるために必要となる毎年の積立額を求める際に用いる係数です。

<計算例>

10年後に老後資金として1000万円貯めたい。年利率1%で運用したとすると、毎年いくらずつ貯めていけばよいですか。1%、10年の減債基金係数を0.09558とします。

【計算方法】



$$1000 \text{ 万円} \times 0.09558 = 95 \text{ 万 } 5,800 \text{ 円}$$

(万円未満四捨五入の時には96万円と記載する)

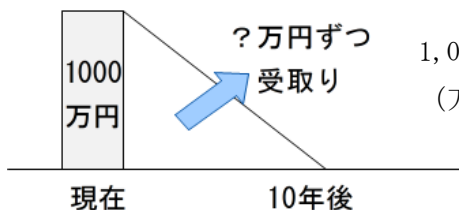
(5) 資本回収係数

現在手元にある金額を運用しながら受け取れる年金額を求める際に利用します。手元資金を一定の利率で運用しながら取り崩した場合に、毎年いくら受け取ることができるかを計算する際に用いる係数です。ローンの毎年の返済額を求める際にも利用されます。

<計算例>

現在手元にある資金1,000万円を今後10年間にわたって年金として受け取る場合、年利率1%で運用したとすると毎年の年金額はいくらになりますか。1%、10年の資本回収係数を0.10558とします。

【計算方法】



$$1,000 \text{ 万円} \times 0.10558 = 105 \text{ 万 } 5,800 \text{ 円}$$

(万円未満四捨五入の時には106万円と記載する)

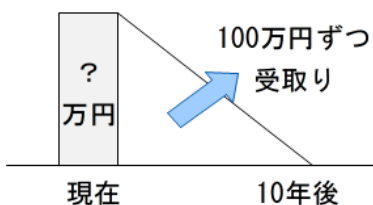
(6) 年金現価係数

目標とする金額（例：年金）を受け取るために必要な現在の元本を求める際に利用します。一定利率で運用しながら所定の金額を毎年受け取るためにはいくらの元本（原資）があればよいかを計算する際に用いる係数です。

<計算例>

10年間にわたって年利率1%で運用し、毎年100万円ずつ受け取りたいと考えた場合、現在いくら必要でしょうか。1%、10年の年金現価係数を9.471とします。

【計算方法】



$$100 \text{ 万円} \times 9.471 = 947 \text{ 万 } 1,000 \text{ 円}$$

(万円未満四捨五入の時には947万円と記載する)

▼理解を深めるワンポイント！

●6つの係数を目的別でおさえておこう！

	将来の金額を求める 場合に用いる係数	現在の金額を求める 場合に用いる係数
一時金	終価係数	現価係数
積み立て	年金終価係数	減債基金係数
取り崩し	資本回収係数	年金現価係数

▼試験にはこう出題された！

●翔平さんは、今後 15 年間で積立貯蓄をして、長男の雄介さんの教育資金として 250 万円を準備したいと考えている。積立期間中に年利 2.0%で複利運用できるものとした場合、250 万円を準備するために必要な毎年の積立金額として、正しいものはどれか。なお、下記<資料>の 3 つの係数の中から最も適切な係数を選択して計算し、解答に当たっては、千円未満を切り上げる。また、税金や記載のない事項については一切考慮しないこととする。(2019 年 1 月 実技：資産設計提案業務)

<資料：係数早見表 (年利 2.0%)>

	現価係数	減債基金係数	資本回収係数
15 年	0.74301	0.05783	0.07783

※記載されている数値は正しいものとする。

1. 124,000 円
2. 145,000 円
3. 195,000 円

→ 2